

牧師室から (2020. 12. 6)

本日12月6日というのはもともと聖ニコラウス（サンタクロースの由来であり、24日に来るサンタさんはニコラウスのドッペルゲンガーのようなものであり、西欧には結構混乱している人がいる）の日であった。地域によって今でもこの前日にもニコラウスがやってきて、その際に子供たちにプレゼントをする。彼が一人一人に「良い子にしていたかな？」と問うと、子供たちは「はい！」と目を輝かせて答え、プレゼントをもらう。私も青年の時に、子供たちに混ざって頂く立場になったことがあるが、その際生真面目になりすぎて「いいえ」と答えてしまったことがある。するとニコラウスは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに憐れみの表情でプレゼントを手渡してくれた。後で知ったことだが、かつてはそのニコラウスに付き人がいたらしい。その名はループレヒトと言って、黒い服を着て手に木の枝や鞭を持っていたようで、悪い子にはプレゼントの代わりにお仕置きをしていたという。まさに「アメとムチ」である。時代が違えば私も危うくお仕置きをされる場所であった。

もともとサンタクロースが与えるのは嬉しいものばかりではなかったのである。良い子には良いものを、悪い子にはお仕置きをというように、善悪のけじめを、曖昧でなくはっきりとつける教育でもあったのだ。それは大人にとっても、クリスマスの御子の誕生というのがキリストの再臨を思うことでもあり、その際のはっきりした審判に臨むということである。

さあ、皆さんは、この一年神さまの子として従順な子であったかな。

(鈴木淳一牧師)

